


<h1 style="font-size: 2em;">指導資料</h1> <p>鹿児島県総合教育センター 令和2年10月発行</p>	<h2 style="font-size: 1.5em;">特別支援教育 第206号</h2>		
	対象校種	中学校 義務教育学校	

二次的障害のある生徒に対する指導・支援 — 自閉症・情緒障害特別支援学級での取組 —

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している中学校の生徒の中には、不注意や集中困難などの一次的障害から学業不振により二次的障害になっている場合がある。そこで本稿では、学校と家庭が連携して認知機能の向上を図り、自尊感情を高める指導・支援の実践例を紹介する。

1 はじめに

自閉症や発達障害等の一次的障害である障害特性（こだわりがある、会話がうまくできない、忘れ物が多い等）が、状況によっては、別の発達障害の行動特性として見られる場合がある。例えば、ADHDの特徴である多動性は、高機能自閉症のある児童生徒の場合にも幼児期にしばしば見られる。また、LD、ADHDの児童生徒が、授業の内容が難しかったり、友達とトラブルを起こしたりした際に、教室に居場所がなくなり、立ち歩いたり、教室から出てしまったりする等の行動が、二次的障害として出てくることもある。

障害特性によるつまずきや失敗が繰り返され、学校生活に対する苦手意識や挫折感が高まると、心のバランスを失い、精神的に不安定になり、様々な身体症状や精神症状が出てしまうなど、二次的障害としての症状には、不登校や引きこもりのように内在化した形が出る場合、暴力や家出、反社会的行動等、外在化した形が出る場合がある（図1）。

二次的障害は、問題が複雑化、長期化し、解決が困難であることが多いため、その対応について、中学校の教師からの当課への相談や、研修会における研究協議の柱となること

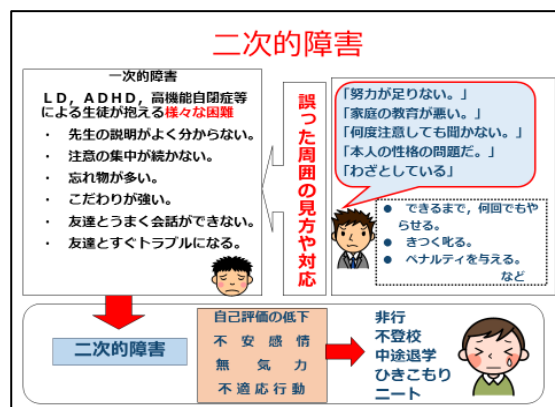


図1 二次的障害の原因

も多い。二次的障害への対応は、一次的障害による特性に応じた指導・支援を工夫するとともに、特性によるつまずきや困難さにより自信や意欲を失ったり自己評価が低くなったりにしないように、自尊感情を高めていくことが大切である。そのためには、自分は大切にされている、必要とされているといった、他者からの称賛や承認、評価が影響する。授業を始め、学校における様々な学習活動において、「分かった」、「できた」という達成感や成就感を感じる経験を積むことが必要である。

そこで本稿では、二次的障害の傾向のある生徒に当課で作成した「認知機能の向上を図る指導・支援プログラム」を取り入れた指導・支援の例を紹介する。

2 認知機能の向上を図る指導・支援プログラム

前述の状況を踏まえ、当課では、認知機能の向上を図る指導・支援を行うために、生徒の状態像から評価までの包括的なプログラムを、**図2**のようにまとめた。

最初の「状態像」の段階では、対象の生徒の学習面・行動面における困難な様子を簡潔に示す。

次に、「実態把握」の段階では、諸心理検査や行動観察などで現段階でのできることと困難なことについての的確に把握していく。

「計画立案」の段階では、実態に基づいての課題の抽出や短期・長期目標や指導内容の設定及び認知の特性に応じた教材・教具の選定・作成、個別の指導計画への位置付け等を行う。また、この段階で環境整備や必要な配慮事項などについても検討していく。

「指導的な取組・支援的な取組」の段階では、1単位時間での取組や帯時間・短時間での取組、家庭での取組など、生徒又は学級、学校の実情に合わせた指導場面を設定し、継続した指導・支援を実施する。

最後の「評価」の段階では、諸心理検査やテスト、日頃の学習の様子や成果物で最終的な評価を行うなど、次年度の計画に反映させていく。



図2 指導・支援プログラム

3 A 中学校における自閉症・情緒障害特別支援学級での取組

第2学年生徒Bは、小学校の頃から物事を忘れることが多く、級友の誤解を受け、誤った見方や対応をされていた。学力不振や思春期の心の変化などが重なり、不登校になっていた。そこで、学校と家庭が連携して生徒Bの自尊感情を高めるために、短期記憶に焦点を当てた指導・支援を行い、学力の定着と生活リズムの改善を図ることにした。

(1) 指導・支援プログラム

生徒Bの指導・支援プログラムは、次のとおりである。

1【状態像】

- ・ ADHDの診断を受け、起立性調節障害を併発している。
- ・ ゲームやネットに依存している。
- ・ 授業中の理解力は高く、意欲的に学習に取り組む場面も多い。しかし、既習事項をすぐに忘れてたり、持ち物の管理が難しかったりして困っている様子も多くなる。

2【実態把握】

- ・ WISC-IV全検査IQ 98, 言語理解指標109, 知覚推理指標104, ワーキングメモリー指標94, 処理速度指標81
- ・ 言葉を理解したり, 説明をしたりすることや視覚情報を理解したり, 推測したりする思考力・推理力は高い一方で, 物事を記憶したり, 素早く処理したりする等, 流暢に情報を処理することが苦手である。

3【計画立案】

- ・ 短期記憶を高める活動を継続して行い, 学力の定着や実行機能の強化を図る。
- ・ 健康で楽しく, 学びのある学校生活を送れるように, 生活リズムの改善を図る。

4 【指導・支援】

<指導的な取組>

- (1) 短期記憶を高める指導を行う。
- ・ 7～8桁の数字や夕食メニューを記憶する。
 - ・ メモの利便性や活用の仕方を指導し、必要に応じ、メモを活用する習慣を図る。
 - ・ 数時間後や翌日に、記憶したことを思い出す場面を設定し、記憶力の強化を図る。
- (2) 学校生活における行動パターンを指導する。
- ・ 登校後・下校前にすることを自分で確認できるように順序を示す。
 - ・ 急な変更以外は、時間割や時間は自分で確認し、行動に移すようにする。
 - ・ 荷物の置き場所を決め、決まった場所に片付けるようにする。

<支援的な取組>

- (1) 手順カードを使用して取り組む。
- ・ 四則の計算や方程式などの計算方法の順序をカード化する。
 - ・ be 動詞や一般動詞、5W1Hを利用した英作文の作り方をカード化する。
 - ・ やり方を忘れて戸惑ったりなぜ間違ったか分からなかったりしたときには、自分で手順カードを見てやり直すように促したり、カードを利用しながら説明をしたりする。
- (2) 家庭と連携する。
- ・ 今日の時間割のコーナー、時間割カード、週時間割表を準備する。
 - ・ 連絡帳で一週間の流れを伝え、一日の様子や明日の確認事項を掲載する。

5 【評価】

- ・ 後述

(2) 指導の実際

短期記憶を高める指導においては、授業中の指導内容が変わったり生徒Bの集中が難しくなったりした時に「記憶タイム」を導入し、短い時間で集中して記憶する練習を行った。また、記憶した内容を数時間後の「記憶タイム」や放課後等に再度尋ねることで、約束したことを忘れずに、後でそれを実行する力を養っていった。「記憶タイム」の活用については、個別の授業では7～8桁の数字、複数の授業では前日の夕食メニューを覚えるなどの内容の工夫をした。さらに、数時間後の記憶内容が正確であれば自分で宿題の内容や量を調整できるようにすることで、記憶することへの意欲を高めさせた。この活動の継続で学習内容の定着、約束したことを覚えることの強化を図った。

次に行動のパターン化である。4月、登下校時に特別支援学級の教室に来ることを確認したが全く守れなかった。交流学級担任と連携しても忘れるので、支援員に迎えを依頼することが続いた。そこで、荷物を特別支援学級の教室に置くことにした。この行動の定着後は、連絡帳の提出、日記の提出とスモールステップで学校生活をパターン化していった。最終的には学習に関する提出物の定着、学力の定着を目指していった。

家庭では、本人・保護者の負担が少ない目標を設定する。自由に過ごしている家庭生活の中で、一つだけ決められた行動を入れることで、乱れていた生活のリズムを調整できるようにした（表1）。

表1 保護者との連携

保護者との連携の内容
<ul style="list-style-type: none">・ 朝の様子をメールで確認する。・ 連絡帳では頑張ったことを中心に知らせ、翌日の準備について連絡する。・ 20時に入浴する。（言葉掛け→アラームへ移行）

(3) 評価

短期記憶の強化を図った結果、徐々に自尊心が高まっている。授業中に、積極的に自分の意見を言ったり、自分から学習課題に取り組んだりする姿が多くなっている。また、分からない問題の場合は、自分から教科書や資料を使って調べたり、手順カードを確認したりすることも多くなっている。

保護者と連携して、遅刻をしても車での送迎で登校を促した結果、1学期、2学期と遅刻は多いが、登校が増えてきた(図3)。それに合わせて少しずつ取り組む内容を増やしていった。担任や保護者のサポートが必要であったが、夏休みの課題を期日内に全部提出できたことは本人の自信にもつながった。基本的な生活習慣について、本人と相談して20時に入浴することに取り組んだが、時間を意識した家庭生活習慣の確立までは至らなかった。生活リズムは、登校が増えることにより1年次から随分改善が見られるようになってきた(図3)。

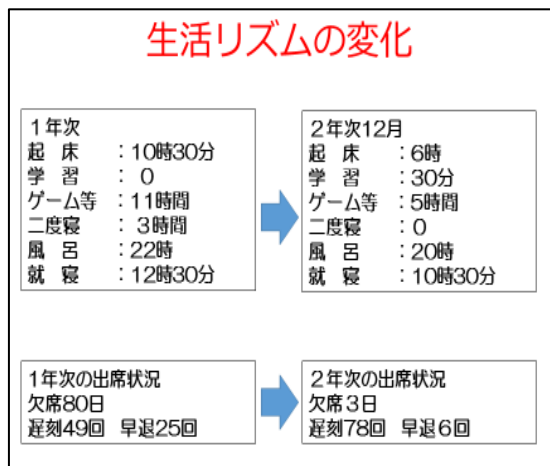


図3 生活リズムの変化

(4) 成果と課題 (成果：○, 課題：●)

- 自分がよく間違えるポイントに自分で気付くようになってきている。
- 忘れ物が減少している。
- 既習事項については、混乱することの多かった数学(計算や方程式)や英語(英作文)で、手順カードを利用して取り組む姿が見られるようになってきている。

- 校時表や週報などで学習内容や時間を確認するようになってきている。
- 就寝時間が23時を越えること、頭痛の訴え、欠席が少なくなっている。
- 本人は、「勉強を頑張ろう」、「部屋を片付けよう」等と思うようになり、意識の変容を保護者も感じている。
- テスト等では手順カードは利用できないので、本人が達成感や成就感を味わっていない。手順カードの改善やテストで利用できる方法を考えていく。
- 提出物を計画的に取り組むことは、まだ難しい。無理のない計画、実行できなかったときの修正の仕方等を一緒に考えて取り組むようにしていく。

4 おわりに

不登校状態に至るきっかけや引きこもり状態を維持させてしまう要因は、様々である。思春期には対人関係が複雑になり、学校で高度の社会性が求められる場面が増える。発達障害のある生徒は、このような状況を苦手とすることがある。また、不注意や集中困難から学習困難、学業不振から不登校状態になる場合もある。いずれも思春期になる前から適切な支援を受けることで回避できることが多い。

二次的障害を予防するためには、生徒の自己評価の低下を予防する方策が大切である。そのために、まずは学習支援、そして生活支援、最後に自己制御の力を育てる支援を家庭と連携し、早期から行うことが必要である。

－引用・参考文献－

- 鹿児島県総合教育センター『研究紀要 124号』令和元年度
- 文部科学省『生徒指導提要』平成22年3月(特別支援教育研修課 宇田 学治)

※ 見やすいフォントを使用しています。